まんま食ねぇあっぱ

この昔話は市内各地に広く分布し、小さな変化も多い。男が妻の正体に気づく前半で終り強欲をいましめる言葉がついたり、最後の節句の由来の部分が強調されるものなどがある。

昔むかし、ある所に爺さまあったけど。爺さま、わげ(若い)やどき、まんまかねぇあっぱ(飯を食わない)(婆)ほしくて、皿っこで一つよりまんまかねぇ、というあっぱもらったと。えで(おやじ)山さ行ってしまうと、あっぱは大き釜さ水汲んで、米一俵あげで、飯たいだど。

そのできた飯をにぎりまんまにして、戸板さえっぺぇあげで、髪ばドサッと前さたらして、頭のまん中さある大っき口あげで「太郎坊もけぇ（食え）、次郎坊もけぇ」と言って、両手で投げこんで食ったど。それ終れば水汲んで、釜洗って、知らんふりしておやじの来るの待っていだけど。

あるどき、おやじ、はり（梁）さ上がって見でびっくりしたど。米俵が少なくなっていだんだど。おやじは山さ行ったふりして、はりさ上がってそっと見でだば、あっぱ鬼になって大っき口あげでまんま食ってらけど。おやじたまげでしまって、あっぱが水汲みに行ってらあいだに、はりがら下りできで、山さ行ってきたふりして家さ入ったど。「あっぱ、しばらく家さけやね（帰らないでいた）でらだもの、家さあしび（遊び）に行ってこい。みやげ何にしたらいがべ」と言っだど。あっぱは「えづこ作ってけれ」と言ったど。おやじは、えづこ作ってあっぱさやったど。あっぱは、おやじをえづこさ入れて、えづこごとかついで、山さ向かっていったけど。

おやじは、どこでおりで逃げたらえべが（良いか）と思っていたど。したっきゃ、ヨゴミと菖蒲がえっぺおが（生えている）ってらどごあったけど。おやじは、えづこからおもいきってとびおりて、ヨゴミと菖蒲のなかさかぐれたど。あっぱは鬼の姿にもどって、おやじをさがしたども、ヨゴミと菖蒲の汁ってつけば体くさるがらといって、とうとうあぎらめで山さ逃げていったど。

「あっぱは、おそろしい鬼であったじゃ…」と、おやじはたまげてしまい、ヨゴミと菖蒲をとって、えさ（家）帰っていったど。

どっとはらぇ。

（平成二年、大湯・安保マツエ氏談）